The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヨモツヘグイ再考 : 古墳における飲食と調理の象徴としての土器
Author(s)	寺前, 直人
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2006, 40, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12252
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヨモツヘグイ再考

── 古墳における飲食と調理の表象としての土器 ──

寺 前 直 人

はじめに

古墳時代は墳墓の築造を含めた葬制に多大なエネルギーを投入した時代である。そして、その儀礼は三百数十年の間に幾度か変質すると指摘されている。なかでも古墳時代後期、6世紀前半に進行した近畿地方における横穴式石室の全面的な導入と土器副葬の開始は、大きな画期としてこれまで注目されてきた。

筆者もいくつかの後期古墳の調査にたずさわり、横穴式石室の導入過程や土器副葬の問題について分析を進めてきた。とくに副葬土器については京都府南部の乙訓地域における古墳と集落における土器の器種構成の分析を通して、土器使用の階層性について検討した（寺前2005）。ただし、前稿では土器組成と墳形や副葬品により判断した古墳の階層性との比較を通して、副葬土器の階層構造を明らかにすることを主眼としたため、それぞれの土器がどのような葬送儀礼のなかで使用されたかを検討することがほとんどできなかった。

いうまでもなく古墳から出土する土器は何らかの目的で古墳に持ち込み「使用」された後、最終的には埋置あるいは廃棄されたものの集積あるいは残欠である。葬制における土器の使用目的については小林行雄や白石太一郎による先駆的な業績があり、今日の研究にも大きな影響を与えている

（小林1949、白石1975）。そこで、本稿では前稿（寺前2005）において分析できなかった葬制における土器の用途について、調理や飲食といった行為やその表象を軸に分析を進めることとする。

1　研究史

小林行雄の「ヨモツヘグイ」論　古墳からみつかる多彩な副葬品のなかに多数の土器が含まれていることは古くから知られていた。それらを体系的に論じたのは小林行雄である（小林1949）。小林は、石室内より煤が付着した土器とともに木炭が伴った出土例と古墳における土製支脚出土をてがかりに、山陰地方において横穴式石室内部で実際の炊飯行為があったことを推定した。さらに近畿地方では竈などを模した土器が石室内から出土することを指摘し、古墳より出土する小像や他器種と組み合ういわゆる装飾須恵器が容器としての機能を完備している点で、厳密な意味での明器とはいえないこと、副葬された土器内部より貝殻や魚骨などが伴う例が少数ながら認められることを根拠として、死者に対する食物供献の存在を積極的に認めた。これらの事実に基づき、小林は記紀にみられる「ヨモツヘグイ」を彷彿とさせる葬送儀礼が6世紀以降の横穴式石室において行われていたことを主張したのである。

ここで重要なのは、小林が出土土器等に基づき、古墳における実際的あるいは象徴的な2つの行為、①墓前炊爨と②食物供献を想定し、それらをあわせて「ヨモツヘグイ」の実態にあてた点である。また、先行研究（高橋1918、島田1928）において中国大陸由来の明器とされていた調理具形土器[1]の系譜を、日本列島内で発生した儀器であるとした点にも注意が必要であろう。小林はこれら調理具形土器がいずれも在来の土師器であることから、必ずしも大陸系統のものとする必要はないと主張したのである。

炊飯具形土器の系譜　小林の研究は、横穴式石室における土器を用いた

葬送儀礼を具体的に復元した研究として、後の研究に大きな影響を与えた。ただし、炊飯具形土器の系譜については、滋賀県大津市所在の古墳群を検討した水野正好の研究により（水野1970）、外来系の文化要素であることが強調されることとなる。水野は文献史料の分析から近江国滋賀郡大友郷、錦部郷、古市郷に漢人系「帰化」氏族が居住していたこと、その領域には特徴的な形態をもつ横穴式石室が集中して分布し、そこから多数の炊飯具形土器が出土していることを指摘し、炊飯具形土器副葬が漢人系を「自称」した集団に特有の葬送儀礼であることを明らかにしたのである[2)]。

白石太一郎は小林が検討した記紀の説話、すなわちイザナギの黄泉国からの逃走説話における「コトドワタシ」と横穴式石室における閉塞儀礼の関係を、閉塞施設のありかたと出土土器から論じた。本稿と関係する後者の論点をみていこう。白石は横穴式石室内における土器の出土位置と器種構成から、死者に対して黄泉国の食物を供する「ヨモツヘグイ」が石室内で執行され、石室の封鎖、具体的には羨道部の閉塞に際して「コトドワタシ」すなわち死霊を石室内に閉じこめる儀礼を行ったと推定している。つまり、古墳各箇所における土器のありかたから具体的な行為の時系列的連続とその目的を文献資料を用いて類推したのである。ただし、水野の指摘を受け（水野1970）、炊飯具形土器の副葬が、中国における「家」概念の中心となる竈に対する嗜好性と結びついた漢人系渡来人による特異な習俗であるとし、これらの有無が、石室において執行された儀礼内容の差異に起因することを予想した（白石1975：p. 363）。

土器副葬と横穴式石室の導入　その後、古墳における土器のありかたに関する研究は須恵器を中心に展開する。亀田博は、これまで検討されることの少なかった木棺直葬の埋葬施設を含め古墳における須恵器の出土位置を検討した（亀田1977）。楠元哲夫も須恵器の器種構成や配置について木棺直葬墓を中心に分析した（楠元1992・1994）。藤原学も須恵器の出土位

置や土師器の共伴関係について検討を加えている（藤原1985・1997）。なかでも土生田純之の研究は重要である。土生田は、初期須恵器が埋葬施設にまで持ち込まれるのは例外的であるのに対し、朝鮮半島では一貫して多量の土器を埋葬施設内に持ち込んでいることを指摘した（土生田1985）。さらに列島では例外的に土器副葬が認められた福岡県池の上・古寺墳墓群を営んだのは、それまで列島になかった「新しいイデオロギーをに基づく新しい儀礼の具現」者、すなわち渡来人であった可能性を指摘した（土生田1985：p. 541）。このような理解を前提に、5世紀代の九州系の横穴式石室に須恵器の石室内埋納がほとんどみられないのに対して、6世紀以後の畿内型石室のほとんどに須恵器埋納が実施されているという差異を重視したうえで、小林や白石の研究を受け（小林1949、白石1975）、畿内型石室は土器副葬すなわち「ヨモツヘグイ」に代表される全く新しい葬送儀礼を内在させたはじめての墓制であり、中国大陸、朝鮮半島由来の死生観や宇宙観の完全な消化を示すものであることを強調したのである（土生田1991：p. 366・土生田1994：pp. 158-161）。

このような研究の進展の結果、畿内型横穴式石室の出現および普及の画期とそこで執行された葬送儀礼の革新性については、多くの研究者が認めるところとなっており、石室内における土器副葬の開始と畿内型横穴式石室の普及の連動を重視し、6世紀前半に新たな葬送イデオロギーの発現をみいだすこのような見解は、今日広く普及した古墳時代像のひとつであるといえよう。

土器副葬と「ヨモツヘグイ」論　以上のような研究の多くが、土器の出土位置に議論を集中させていった過程で、分析の対象器種は出土土器の多数を占める坏などの飲食器におのずと偏っていった。しかし、古墳における飲食行為を暗示させる土器の出土は古墳時代前期、あるいは弥生時代に遡りうる要素であることは、繰り返し注意が促されているのである（小林

1949・1976：p. 275、白石1975：p. 365、高橋1998：p. 16)。だからこそ、小林は「ヨモツヘグイ」を論じるにあたり、古墳における飲食器を火の使用を伴う調理具の存在とあわせて議論したのではないだろうか。葬制の場における「火の浄穢の観念」を根幹とする調理という所作が、飲食所作と結びついた一連の行為こそが、小林が想定した「ヨモツヘグイ」なのである。つまり、小林の論考のなかで繰り返し強調された「火」の存在あるいは暗喩と結びついた出土品、すなわち炊飯具形土器こそが「ヨモツヘグイ」論の基軸なのであり、飲食用の容器が石室内にもちこまれるという事実はあくまで調理具とのセットという意味で重要なのである。

ところが、水野正好の研究によって（水野1970)、古墳に副葬される炊飯具形土器は普遍的な存在ではなく、渡来人と関係する特殊な葬制の一要素であることが明らかになり、新来の横穴式石室における葬送儀礼一般を論じるにおいて炊飯具形土器は適切な遺物ではなくなってしまった。これにより小林が提唱した意味での「ヨモツヘグイ」論の資料的根拠の多くはは後期古墳一般では存在しないことになったのである。

にもかかわらず、すでに紹介したように器種を問わない土器の石室内への「持ち込み」という事実が、無批判に「ヨモツヘグイ」論と結びつき、葬制におけるイデオロギーの画期の考古学的証拠として広く喧伝されている現状はいささか問題があるのではないだろうか。

一方、炊飯具形土器は水野の研究後、型式や出土位置に関する研究が進展した（松浦1984、阪口1985、関川1988、近野1990、中村1990、卜部1991、近澤1992、北野1996、中西1999、田中2003、岡田2004)。ただし、これらが葬送儀礼でどのように使用されていたのか、その有無が儀礼内容の差異を反映していたかという問い（白石1975：p. 363）に対する答えはいまだでていない。

本稿の視点　やや冗長に筆者が研究史に感じるところの問題点を述べて

きた。しかし、小林の指摘以降50年以上が経過したものの、6世紀における葬制の変質、とくに横穴式石室とそこで執行された儀礼を論じるうえで、大きな課題が残されていることが理解していただけたかと思う。

そこで、本稿では小林行雄が提示した論点を受け、石室内から出土する土器を次の3つのカテゴリーに区分した上で分析を進めることとする。まず、**①坏、椀、碗といった飲食器、②煮沸具である土師器甕や炊飯具形土器といった調理具、③貯蔵用の壺、甕、瓶類で構成される貯蔵具**に須恵器、土師器を区分する。これらのうち、②と③の存在はすでに指摘があるように死者の世界における「生活」用具である可能性が高い。一方で①は死者の世界における生活用具である可能性とともに、葬送儀礼のなかでの飲食行為を象徴する土器である可能性も考えられよう。この区分は飲食器点数の多寡により区分できるかもしれない。すでに指摘されているように横穴式石室、木棺直葬を問わず①飲食器の出土点数は複数にわたるものが多く（楠元1992)、多人数での使用を暗示させるからである。したがって、消極的にではあるが、①飲食器が少数にとどまる場合は前者の意図により副葬された可能性が考えられよう。また、③貯蔵具も死後の生活道具であるとともに大型の壺と器台が組み合わさる例があることから、酒宴のような場を表象している可能性もあろう。

以上のような副葬土器の表象に関する解釈は図1のようにまとめることができる。このような前提に基づき、まずは表象している行為が大変明瞭である炊飯具形土器が出土している古墳において、共に副葬された土器組成から葬送儀礼を分析していこう。そして、同時期の炊飯具形土器をもたない古墳群や地域における土器組成の比較をとお

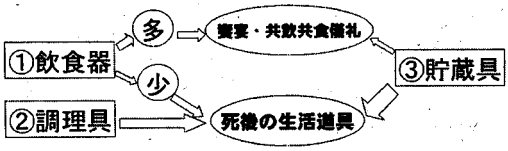

図1　古墳出土土器の用途と意図

して、古墳時代後期における葬制上の画期のありかたを明らかにすることをめざす。

2　炊飯具形土器を伴う古墳

炊飯具形土器副葬古墳の分布　では、以上の問題意識に基づき具体的分析を進めていくこととする。まず、炊飯具形土器がどのような古墳から出土しているかを確認しておきたい。炊飯具形土器は滋賀県南部、大阪府南部、そして奈良県南部に集中することが知られているが、今回の分析では大阪府と奈良県において炊飯具形土器が出土し、かつ共伴した土器が判明している45古墳を対象として分析を進めることとする。

図2はその分布を示している。すでに先学により指摘されているように炊飯具形土器が出土する古墳は、特定の群集墳に集中する傾向が強い。なかでも大阪府河南町・太子町に所在する一須賀古墳群羽曳野市に所在する飛鳥千塚古墳群、奈良県高取町に所在する与楽古墳群などでは発掘調査が実施された横穴式石室の3割以上で炊飯具形土器が伴っている（卜部1991）。これらの群集墳を以下では**炊飯具形土器集中型**と呼ぶこととする。

また、群集墳中に少数ではあるが炊飯具形土器が副葬されている古墳がみいだ

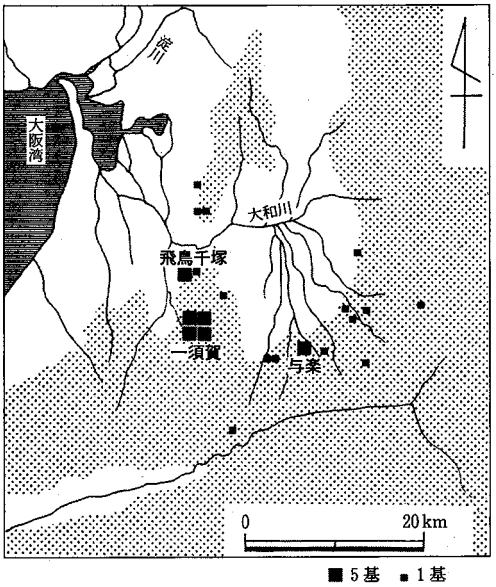

図2　炊飯具形土器の分布

される事例もある。奈良県葛城市寺口忍海古墳群や御所市巨勢山古墳群がそれであり、これらの群集墳は先述の炊飯具形土器集中型の群集墳と近接している。これらの群集墳を**炊飯具形土器少数型**と呼ぼう。

炊飯具形土器出土古墳の規模と性格　炊飯具形土器が出土した古墳の規模と墳形を示したのが図3である。ただし、近畿地方では6世紀後半以降、前方後円墳が激減することから、6世紀から7世紀に属するこれらの古墳の規模を論じる場合、時期的な区分が必要である。そこで図3では炊飯具形土器出土古墳を6世紀前半（MT15・TK10型式期）とそれ以後の2段階に区分して表示している。この図からは6世紀前半では、炊飯具形土器出土古墳は墳長22m以下であり、多くは直径15m前後であることがみてとれよう。6世紀後半（TK43型式期）以降もこの傾向は続くものの、墳長25m以上と群集墳中では最も大きなクラスの円墳に伴う例が散見されることには注意が必要である。また、墳長40〜50mの前方後円墳[3]である奈良県桜井市珠城山1号墳も当該期に属するとみられる。このように6世紀後半以降では、珠城山古墳のような前方後円墳においても使用が確認できるものの、6世紀前半と同じく小規模な円墳での使用が多数を占め

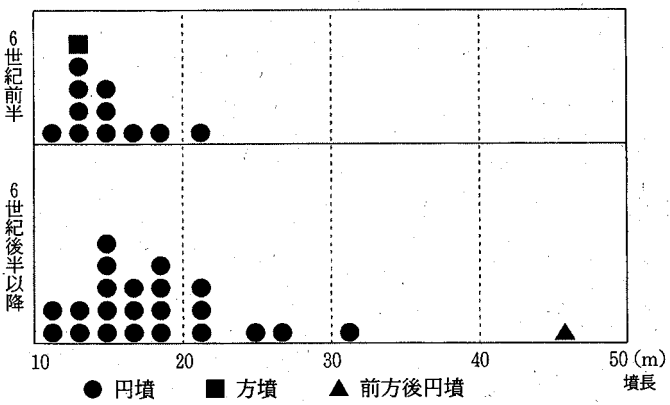

図3　炊飯具形土器出土古墳の規模と墳形

ているのである。

また、すでに指摘されているように炊飯具形土器出土古墳は穹隆状持ち送りという特徴をもった石室から出土することが多い（水野1970、山崎1983、千賀1999）。土器以外の副葬品としては、装身具である鉗子（関川1988）が副葬された事例が目立つ。これらの状況から炊飯具形土器副葬古墳は渡来系集団が構築した古墳であるという解釈が有力である。また、金銅装馬具の副葬が散見される一方で、鉄鏃を含む武器類の出土が非常に少ないことから、被葬者の文官的性格を想定する意見もある（関川1988、卜部1991）。今回集成した45例においてもそのような傾向がみてとれる。また、群集墳ごとの様相でみても、炊飯具形土器集中型の群集墳において、このような傾向がより強く認められる。

3　炊飯具形土器を伴う葬送儀礼

炊飯具形土器とともに使用された土器　では、6世紀前半とそれ以降に区別したうえで、炊飯具形土器出土古墳における共伴土器組成をみてみたい（表1）。

盗掘を被っている事例が多いため不明な点が多いが、6世紀前半では出土土器の点数は少ない。まず、須恵器のありかたについて検討しよう。6世紀前半に属する14古墳中、坏が伴うのは8例で6割ほどであり、6例の古墳では坏が欠落しているのである。また、坏が出土している埋葬施設でも5点以上出土しているのは、一須賀B11号墳とB07号墳のみで点数自体が少ないのも特徴である。また、瑕が伴うのは14古墳のなかで一須賀古墳群D10号墳の1例にすぎない。一方で、貯蔵具である壺・甕類を伴うのは14古墳中9例で全体の8割程度と、坏や瑕よりも高い共伴率を示す。

次に土師器のありかたをみていこう。14古墳のうち器種が判明する土師器が出土しているのは11例である。うち5例に坏や鉢などの飲食器、同じ

く5例に甕、そして3例には壺が伴い、煮沸具と区分すべき土師器甕の存在が目立つ。なお、須恵器飲食具が伴わない一須賀B14号墳においても土師器の鉢が伴っている。

以上のような土器組成の典型的な事例としては一須賀I19号墳をあげることができよう。図4に示したようにミニチュア化した1セットの竈(7)、甕(6)、そして甑(5)とともに甕あるいは鉢を模したミニチュア土師器(2～4)に、器高22cmの須恵器広口壺(1)が伴う。他に石室内から出土したのは、鉄釘と釵子のみであった。

いずれの事例においても副葬土器の点数自体が少なく、遺物自体の遺存状況にばらつきがあるために、明瞭な傾向はみいだしがたいものの、6世紀前半における炊飯具形土器出土古墳では、貯蔵具である須恵器壺や炊飯具である土師器甕の存在が目立つ一方で、飲食器である瑞[4]を欠き、須恵器坏や土師器飲食器も多いとはいえない。

6世紀後半以降は副葬土器の点数が増加するに伴い共伴率は増加し、須恵器坏が伴わないのは1割程度、瑞が伴わないのは5割程度、壺・甕が伴わないのは1割にも満たない。瑞と瓶類を除く須恵器器種が普遍的に認められるようになる。一方、土師器の副葬古墳も多く、31古墳中28古墳から器種が判明する土師器が出土しており、坏や鉢、椀などの食器が18例、甕が15例、壺が15例であり、ここでも煮沸具である甕の出土が目立つ。

以上の分析の結果、6世紀前半の炊飯具形土器出土古墳では貯蔵具である須恵器壺が伴うことが多く、炊飯具形土器の存在と合わせて考えると②調理具と③貯蔵具を中心に少数の①飲食器が伴うという傾向がみてとれよう。また、6世紀後半については、6世紀前半の傾向が維持されつつも、①飲食器が増加していることがみてとれよう。

このような傾向が炊飯具形土器集中型の群集墳全体にも該当する可能性がある。表2は、先に集中型とした古墳群のなかでも、6世紀前半に属す

表１　大阪府・奈良県における炊飯具形土器出土古墳一覧

6世紀前半

	所在	古墳名	墳形と規模	土器型式	須恵器				土師器
					坏類	碗	壺・甕	瓶類	
1	奈良県桜井市	桜井児童公園２号墳	？	MT15？			○		壺
2	大阪府河南町	一須賀Ｉ19号墳	円・10ｍ	MT15			○		あり
3	大阪府河南町	一須賀Ｉ18号墳	円・12ｍ	MT15	△		△		坏
4	大阪府河南町	一須賀WA1号墳	円・20ｍ	TK10	○		○	○	椀・鉢・甕
5	大阪府河南町	一須賀B11号墳	方？・12ｍ	TK10	○		○		鉢
6	大阪府河南町	一須賀B14号墳(B８)	円・13ｍ	TK10？			○		鉢
7	大阪府河南町	一須賀D10号墳	円・15ｍ	TK10	○	○	△		鉢
8	大阪府河南町	一須賀D12号墳	円・19ｍ	TK10			△	○	甕
9	大阪府河南町	一須賀B07号墳(B３)	円・14ｍ	TK10	○			○	なし
10	大阪府八尾市	高安郡川16号墳	円・12ｍ	TK10	○		○		壺・平底鉢
11	奈良県桜井市	浅古所在	円？	TK10	△				なし
12	奈良県御所市	巨勢山408号墳	円・17ｍ	TK10	○		○		甕
13	奈良県高取町	与楽ナシタニ５号墳	円・15ｍ	TK10？					壺・甕
14	奈良県高取町	与楽ナシタニ１号墳	円・12ｍ	なし			○		甕

6世紀後半以降

15	奈良県桜井市	珠城山１号墳	前・45ｍ	TK43	○		○		椀・壺・甕・小型器台
16	奈良県桜井市	植松東４号墳	円・10ｍ	TK43	○		○	○	壺・椀
17	大阪府河南町	一須賀WA01号墳	円・30ｍ	TK43	○		○		鉢
18	大阪府河南町	一須賀WA19号墳	円・20ｍ	TK43			○		あり
19	大阪府河南町	一須賀WA27号墳	円・？	TK43	○	○	○		壺・甕
20	大阪府羽曳野市	飛鳥千塚奉献塔山１号	？	TK43	○	○	○		子持ち高坏
21	大阪府柏原市	平野大県10－１号墳	？	TK43	○	○	○	○	なし
22	奈良県橿原市	沼山	円・18ｍ	TK209	○	○	○		壺
23	奈良県高取町	与楽ナシタニ２号墳	円・17ｍ	TK209		○	○		鉢・高坏
24	奈良県葛城市	寺口忍海Ｈ－41号墳	円・10ｍ	TK209	○		○		壺
25	奈良県明日香村	上５号墳	円・17ｍ	TK209	○	○	○		なし
26	奈良県高取町	与楽ヲギタ２号墳	円・25ｍ	TK209	○	○	○		甕
27	奈良県高取町	与楽ナシタニ６号墳	円・16ｍ	TK209	△	○	○		壺・甕
28	奈良県御所市	巨勢山415号墳	円・15ｍ	TK209	○	○	○		壺
29	大阪府河南町	一須賀B04号墳	？	TK209	○		○		甕・鉢
30	大阪府太子町	一須賀Q01号墳	円・21ｍ	TK209	○		○		壺・甕・高坏
31	大阪府太子町	一須賀O05号墳	円・18ｍ	TK209	○	○	○		椀・鉢・甕
32	大阪府河南町	一須賀E01号墳	円・12ｍ	TK209	○		○		椀・壺・甕
33	大阪府太子町	一須賀Q09号墳	円・19ｍ	TK209	○	○	○		椀
34	大阪府河南町	一須賀L04号墳	円・18ｍ	TK209	○		△		あり
35	大阪府河南町	一須賀WA06号墳	円・15ｍ	TK209	○	○	○	○	壺・鉢
36	大阪府河南町	一須賀B12号墳１号石室	方・14ｍ	TK209	○		○	○	坏・壺・甕
37	大阪府河南町	一須賀WA20号墳	円・13ｍ	TK209	○	○	○		甕
38	大阪府柏原市	平野大県20－３号墳	円・26ｍ	TK209	○	○	○	○	壺・高坏
39	大阪府羽曳野市	飛鳥千塚Ａ－４号墳	円・15ｍ	TK209	○		○	○	鉢・坏・甕
40	大阪府羽曳野市	飛鳥千塚Ａ－12号墳	？	TK209			○		高坏・鉢・甕・壺
41	大阪府羽曳野市	飛鳥千塚奉献塔山２号墳	？	TK209				○	甕
42	大阪府羽曳野市	飛鳥千塚切戸２号墳	円・14ｍ	TK209	○		○	○	甕・壺・坏・高坏・子持高坏
43	大阪府羽曳野市	大谷２号墳	円・20ｍ	TK217	○		○		甕・高坏・壺・鉢
44	奈良県宇陀市	石田１号墳	円？	TK217	○		○	○	椀
45	奈良県五條市	勘定山	？	TK217	○		○		高坏

△は蓋のみの出土

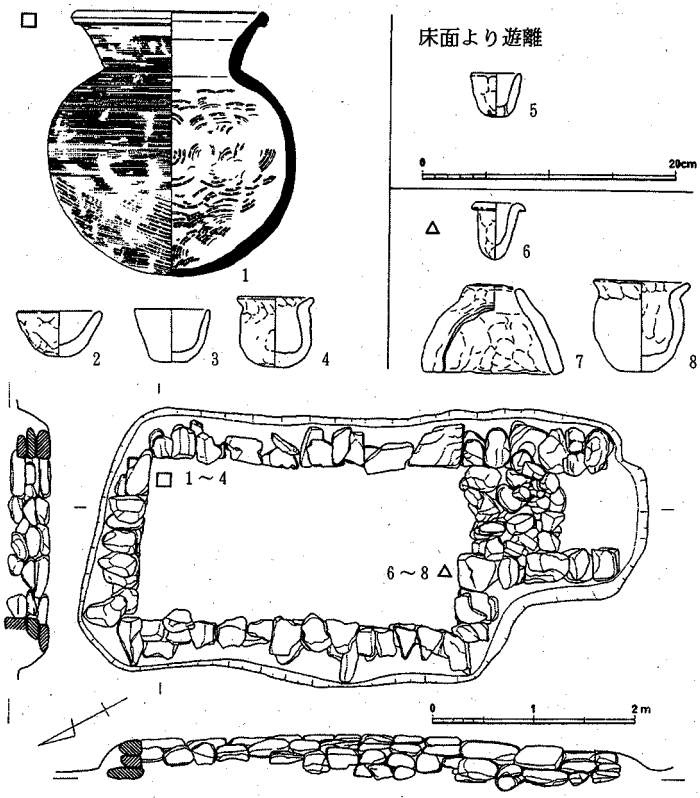

図4　大阪府一須賀Ⅰ19号墳横穴式石室と出土土器

る埋葬施設が多い一須賀古墳群Ⅰ支群のうち6世紀前半に属する8例の埋葬施設における土器の共伴状況である。Ⅰ支群では18号墳と19号墳において炊飯具形土器が出土しており、すべての横穴式石室で器高16cm前後の小型壺を中心に壺類が伴う一方で、坏の出土例は竪穴式石室であるⅠ5号墳に限られる。土師器飲食器の出土も4古墳に限られ、貯蔵具主体の土器副葬が認められるのである。

炊飯具形土器を伴わない古墳との比較　以上のような傾向は、同時期の

表2　大阪府一須恵古墳群Ⅰ支群における6世紀前半の土器組成

古墳名	土器型式	須恵器				土師器		埋葬施設
		坏類		壺				
		坏	高坏	小型	大型	そのほか	炊飯具	
Ⅰ4号墳	MT15	×	無蓋	×	○	高坏・鉢	×	横穴式
Ⅰ5号墳	TK10	3	×	○	×	甕・鉢	×	竪穴式
Ⅰ6号墳	MT15	×	×	無頸	脚付	×	×	横穴式
Ⅰ12号墳	TK10？	×	×	○	×	×	×	横穴式
Ⅰ15号墳	TK10？	×	×	○	×	壺	×	横穴式
Ⅰ18号墳	MT15	×	×	脚付	×	坏	○	横穴式
Ⅰ19号墳	MT15	×	×	○	×	甕・鉢	○	横穴式
Ⅰ21号墳	TK10？	×	×	○	×	壺4	×	横穴式

炊飯具形土器が出土しない古墳や地域における土器組成と比較することによって、より明確となる。

表3は6世紀前半の京都府南部に位置する乙訓地域の古墳における埋葬施設出土須恵器の器種組成である。これらの埋葬施設のいずれにおいても炊飯具形土器は出土していない。表3からは須恵器坏が方墳以上のすべての古墳に副葬されていること、4基みつかっている墳丘をもたない木棺直葬墓ですら半数で坏が副葬されていることなどがみてとれよう。また、方墳でも坏の出土点数が非常に多いことが特徴的である。さらに前方後円墳である物集女車塚古墳と井ノ内稲荷塚古墳でしか土師器が出土しておらず、それも壺が1点ずつである点は、先述の炊飯具形土器出土古墳における土師器のありかたと大きく異なる。これらの特徴のうち、土師器の有無と量は地域差が著しい。例えば、奈良県南部の御所市石光山古墳群（奈良県立橿原考古学研究所1976)、葛城市寺口千塚古墳（奈良県立橿原考古学研究所1991)、寺口忍海古墳群では古墳の規模を問わず土師器が比較的多く副葬されている。土師器選択に地域差があることはすでに指摘したとおりである（寺前2005：p. 456)。ただし、土師器の器種に注意をするならば、炊飯具形土器出土古墳では土師器甕が出土する例が多い傾向があるといえよう。

表3　乙訓地域における6世紀前半の埋葬施設出土土器組成

古墳名	墳形と規模	須恵器					土師器
		瑞	坏類		壺・甕	瓶類	
			高坏	坏			
物集女車塚横穴式石室	前・48m	○	○	○	○	○	壺
井ノ内稲荷塚・後円部横穴式石室	前・46m	○	○	○	○	○	壺
井ノ内稲荷塚・前方部木棺			○	○			
七ツ塚4号墳2号木棺	帆・21m	○		○	○		
七ツ塚4号墳1号木棺				○	○	○	
七ツ塚4号墳3号木棺				○	○		
七ツ塚3号墳1号木棺	方・15m			○	○		
七ツ塚3号墳2号木棺				○	○		
七ツ塚3号墳3号木棺				○	○		
七ツ塚3号墳4号木棺				○	○	○	
井ノ内1号墳木棺	方・12m			○	○		
開田SX32	墳丘なし			○	○		
井ノ内SX23	墳丘なし			○			
井ノ内SX18	墳丘なし				○	○	
井ノ内SX19	墳丘なし				○		

一方、飲食器である坏類が少ないという炊飯具形土器副葬古墳の特徴は、前述の奈良県南部における炊飯具形土器少数型群集墳の土器組成と比べても、明らかに異質であり、坏類などの飲食器をほとんど必要としない葬送儀礼の存在を暗示させる。

大型古墳との比較　では、同時期の大型古墳で執行された土器を用いた儀礼はいかなるものであったのかをみてみよう。表4は、畿内地域における大型古墳のうち5世紀末から6世紀末までの横穴式石室内に納められた土器組成が、比較的明瞭な事例を示したものである。

各古墳において、須恵器高坏と瑞を主体とする飲食器とともに壺が認められる一方で、提瓶や横瓶などが持ち込まれることは少ない。また、土師器壺が奈良県広陵町牧野古墳を除くすべての古墳で認められる一方で、煮沸具である甕は規模が小さく渡来系の要素の強い高井田山古墳のほかは藤ノ木古墳でしか認められない。

表4　畿内地域大型古墳における土器組成

所在	古墳名	土器型式	墳形と規模	須恵器					土師器
				坏類		瑞	壺・甕類	瓶類	
				坏	高坏				
大阪府柏原市	高井田山	TK23/47	前？・22m		○	○			壺・甕・製塩土器
奈良県高取町	市尾墓山	MT15	前・66m	○	○	○	○		壺・高坏
京都府向日市	物集女車塚	TK10	前・48m	○	○	○	○		壺
京都府長岡京市	井ノ内稲荷塚	TK10	前・45m	○	○	○	○	提・横	壺
奈良県葛城市	平林	TK43	前・62m	○	○	○	○	提	壺・坏・高坏
奈良県斑鳩町	藤ノ木	TK43	円・48m		○	○	○		壺・高坏・甕
奈良県平群町	烏土塚	TK43	前・60m	○	○	○	○		壺・台付鉢・台付壺
奈良県広陵町	牧野	TK209	円・55m	△	○	○	○		なし

△は蓋のみ

事例が少ないため不明瞭な点は多いものの、上位層の古墳では脚付器種と瑞を主体とした飲食器を使用する葬送儀礼が執行されており、そこに器台にのせられた大型壺などが伴っていたと考えられよう（寺前2005）。少なくとも、調理と貯蔵を表象するような土器を持ち込むような儀礼は、上位層に採用されることはまれであったと判断できるのである。

6世紀における葬制の変遷過程　以上の分析の結果、6世紀前半において炊飯具形土器出土古墳および炊飯具形土器集中型の群集墳では、貯蔵具である須恵器壺と煮沸具である土師器甕の副葬が目立つ一方で、飲食器は須恵器、土師器ともに副葬されないことがあり、副葬点数も少量であることが判明した。つまり、これらの古墳あるいは群集墳における葬送儀礼において、飲食器よりも炊飯を含む調理や貯蔵を表象とする土器が好んで選択されるのである。この事実を、小林行雄の先駆的な研究成果をふまえ積極的に評価するならば、死後の「黄泉の国」での「生活」用具を意識した土器組成であると解釈できよう。

また、6世紀後半以降になると、炊飯具形土器出土古墳および集中型の群集墳でも須恵器、土師器を問わず飲食器の出土事例および出土点数が増加し、一般の群集墳における土器組成との類似度が高まる。このような現象の背後には、6世紀前半において特異な葬制を保持していた一須賀古墳

群や与楽古墳群を営んだ集団が、在来集団との婚姻などの交流をへて、在来の葬送習俗を徐々に取り入れた可能性が考えられよう。

このような影響が群集墳間でうかがわれる一方、大型古墳に埋葬された上位層では、脚付器種を主体とする多量の飲食器を用いた多人数での饗宴が想起されるような器種構成[5]が畿内型横穴式石室導入以降も一貫して維持されており、炊飯具形土器や土師器甕といった調理具が器種組成に加わる事例はきわめて少ないことが判明した。

したがって、6世紀初頭前後において畿内型横穴式石室が前方後円墳をはじめとする大型古墳へ導入された以後も、これらに埋葬された在来の厚葬墓築造者層は死後の生活を意識した葬送儀礼を受容せず、その後も一貫してその受容は低調であったと考えざるをえないのである。

4　結論

炊飯行為の象徴を含む新しい葬送儀礼は6世紀初頭、畿内地域において定型化した畿内型横穴式石室と相前後して出現する。ただし、炊飯具形土器は畿内型横穴式石室のなかでも石室形態（水野1970、山崎1983、千賀1999）あるいは副葬品目（関川1988）に渡来的要素をもった小規模墳に限定して認められるのみである。これらの古墳、例えば桜井児童公園2号墳や巨勢山408号墳は畿内型横穴式石室の先駆的存在でもあり、それ以後にこの新しい石室形態が首長墳、群集墳を問わず急速に普及していくことは、すでに広く知られているとおりである。

新しい横穴式石室が円滑に普及する一方で（土生田1991、富山1994、太田1999）、初期の畿内型横穴式石室の一部で執行された新たな葬送儀礼、すなわち炊飯具形土器といった調理具に壺などの貯蔵具が加わるという死者の世界での「日常」生活を意図した土器副葬習俗の普及が横穴式石室を採用した古墳においても低調であることは、これまでの分析から明らかで

ある。とくに大型古墳の被葬者層への普及はきわめて限定的なのだ。

したがって、少なくとも小林行雄が想定した「ヨモツヘグイ」を前提とするかぎり、「畿内型石室は「ヨモツヘグイ」に代表される全く新しい葬送儀礼を本来的に内存した始めての墓制」であると（土生田1994：p. 160）評価できるのは、ごく一部のきわめて外来要素が強い群集墳に限られるのではないだろうか。むしろ、新たな土器副葬習俗の「拒絶」こそが、前方後円墳をはじめとする大型古墳の横穴式石室に埋葬された被葬者の葬送儀礼の特質として評価すべきなのである。

6世紀における葬送イデオロギーの変質。新しい黄泉国思想を背景とした儀礼の普及。いずれも観念世界を対象とした議論であり、考古資料に基づいて検討しにくい分野である。しかし、土器組成という一つの考古学的事実に基づくならば、畿内地域における横穴式石室という新たな石室形態導入の急速な普及とは異なり、新たなイデオロギーの普及はかならずしも順調であったわけではない（高橋1999：p. 164）

すでに論じられてきたように横穴式石室の導入自体、葬送儀礼において大きな画期であり、それ自体を過小評価することはできない。ただし、横方向に開口する埋葬空間における葬送儀礼、新たな埋葬型式の普及とそこで執行された葬送儀礼の問題を論じるためには、閉塞施設の構造[6]、埴輪祭式の終焉過程、そして埋葬者選択原理の変化（田中1995、清家2002）などのさまざまな要素とともに分析を進める必要があろう。今後は、これらの総合的な観点から横穴式石室墓制の導入と普及過程について考えてみたいと思う。

本稿の執筆にあたっては大阪大学考古学研究室の諸氏、小浜成氏、福辻淳氏、桜井市教育委員会からはご助言および資料見学に際して格別のご配慮を賜りました。記して感謝します。

注

1) 古墳から出土する竈、甕（釜）、甑、鍋を模した土製品はミニチュア炊飯具あるい竈形代などと呼称されるが、例えば竈形土器の器高は10cm以下のものが散見される一方で40cm近いものも存在する。そこでこれまでの研究史をふまえ（近野1990、田中2004）、本稿では炊飯具形土器と呼称して以下の議論を進める。なお、実際に煮炊きされた痕跡は認められないことは、これまで繰り返し指摘されているとおりである。

2) また、水野は朝鮮半島および中国大陸の状況にも言及した上で、その系譜について、炊飯具のミニチュアの副葬は中国でみられるものの朝鮮半島には認めらないこと、一方で日本列島にみられる炊飯具形土器の形態は中国大陸のそれではなく朝鮮半島のものに類似していることから、漢人系の渡来人がかつての故地で行っていた炊飯具形「明器」の副葬習俗を、朝鮮半島より導入された炊飯具を祖形に復活させたと解釈している（水野1970：p.88）。ただし、近年の朝鮮半島における調査の進展により少数ながら事例が指摘されるに至っており、亀田修一は朝鮮半島経由であることを指摘している（亀田2003）。炊飯具形土器副葬の系譜は、朝鮮半島の事例を含めて検討すべき課題であるが、筆者は研究初期の水野指摘、すなわち炊飯具形土器副葬が、大陸諸文化を念頭に列島内部の中国系を自称する集団によって新たに創られた伝統であるという解釈に魅力を感じる。

3) 奈良県葛城市大和二塚古墳の造出部石室からは多数の須恵器と土師器が出土しており、ミニチュアではない土師器鍋形土器が1点出土している（奈良県立橿原考古学研究所1962）。

4) 瓻は液体を入れる容器であると考えられ、胴部側面に穿たれた孔に管を挿入し、注器として使用されたと考えられている（小林1959）。大型のものと小型のものが知られているが、今回分析する古墳時代後期以降については、小型のものが中心となることが知られていることから（小池1999）、飲食器に分類して以下の分析を進めることとする。

5) 飲食器を中心とした須恵器の古墳での使用は、近畿地方における横穴式石室に先行して進行していることが、5世紀の初期須恵器研究のなかで、すでに指摘されている（植野1980、木下1984）。また、楠元哲夫は須恵器祭式の導入が群集墳の形成と不可分に結びついていることを指摘している（楠元1992：p.501）。筆者も楠元らの指摘を受け、小古墳における窖窯焼成の埴輪樹立を論じたことがある（寺前2001：p.69-71）。これら窯業製品の小古墳への導入が、5世紀においていかなる思想的背景を

もっていたかを論じることも重要であろう。

6) これらの問題のうち、閉塞施設の変遷については別稿を用意している(寺前未刊)。

参考文献

植野浩三1980「西日本の初期須恵器 ── 三ッ城古墳の須恵器を中心として ──」『奈良大学紀要』第9号、奈良大学

卜部行弘1991「その他土製品」『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ副葬品、雄山閣出版

太田宏明1999「「畿内型石室」の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第1号、考古学研究会

岡田圭司2004「古墳出土の煮炊具形土器」『地域と古文化』『地域と古文化』刊行会

亀田修一2003「渡来人の考古学」『七隈史学』第4号、七隈史学会

亀田　博1977「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻第4号、考古学研究会

北野　重1996「炊飯具土器の副葬事例」『韓式系土器研究』Ⅵ、韓式系土器研究会

木下　亘1984「古墳出土の初期須恵器をめぐって ── 畿内及びその周辺地域の資料 ──」『原始古代社会研究』6、原始古代社会研究会

近野正幸1990「古墳出土の炊飯具形土器について」『神奈川考古』第26号、神奈川考古同人会

楠元哲夫1992「六文銭 ── 古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景 ──」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ、同志社大学考古学シリーズ刊行会

楠元哲夫1994「六文銭以前 ── 古墳における須恵器祭式定式化以前の陶質土器と須恵器 ──」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ、同志社大学考古学シリーズ刊行会

小池　寛1999「瑟考」『瓦衣千年 ── 森郁夫先生還暦記念論文集 ──』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

小林行雄1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊、1976『古墳文化論考』所収、平凡社を参照

小林行雄1959「はそう」『図解考古学辞典』東京創元社

阪口俊幸1985「奈良県出土のミニチュア炊飯具」『石田1号墳』奈良県文化財調査報告書第44集、奈良県立橿原考古学研究所

島田貞彦1928「本邦発見の竈形土器：『歴史と地理』第22巻第５号、史学地理学同攷会
白石太一郎1975「ことどわたし考 ── 横穴式石室の埋葬儀礼をめぐって」『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念、吉川弘文館
清家　章2002「近畿古墳時代の埋葬原理」『考古学研究』第49巻第１号、考古学研究会
関川尚功1988「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』第９、吉川弘文館
高橋健自1918「釜及竈形土器」『考古学雑誌』第９巻第３号、日本考古学会
高橋克壽1998「古墳築造システムの展開」『中期古墳の展開と変革 ── ５世紀における政治的・社会的変化の具体相 ── 』第44回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会
高橋克壽1999「埴輪と古墳の祭り」『古代史の論点』５神と祭り、小学館
田中昌樹2003「横穴式石室に副葬されるミニチュア炊飯具 ── 奈良県を中心として ── 」『上５号墳』奈良県文化財調査報告書92集、奈良県立橿原考古学研究所
田中良之1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房
千賀　久1999「新たな渡来集団の横穴式石室」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ、同志社大学考古学シリーズ刊行会
近澤豊明1992「竈形土製品」『長岡京古文化談叢』Ⅱ、中山修一先生喜寿記念事業会
寺前直人2001「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式 ── 豊島地域における小古墳の分析を通して ── 」『待兼山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
寺前直人2005「後期古墳における土器使用の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第３冊、大阪大学文学研究科考古学研究室
寺前直人未刊「羨道の変遷とその背景」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第４冊、大阪大学文学研究科考古学研究室
富山直人1994「横穴式石室考 ── 畿内を中心として ── 」『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会
中村行義1990「竈形土器考」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
中西克宏1999「曲げ庇系竈を副葬する古墳」『光陰如矢』荻田昭次先生古稀記念論集、「光陰如矢」刊行会

土生田純之1985「古墳出土の須恵器（一）」『末永先生米寿記念獻呈論文集』乾、末永先生米寿記念獻呈論文集記念会
土生田純之1991『日本横穴式石室の系譜』学生社
土生田純之1993「古墳出土の須恵器（二）」·関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学
土生田純之1994「畿内型石室の成立と伝播」『古代王権と交流』5、名著出版
原田　修1987「高安郡川16号墳」『韓式系土器研究』Ⅰ、韓式系土器研究会
藤原　学1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念獻呈論文集』乾、末永先生米寿記念獻呈論文集記念会
藤原　学1997「高井田山古墳出土須恵器をめぐって」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
松浦俊和1984「ミニチュア炊飯具形土器論 ── 古墳時代後期・横穴式石室墳をめぐる墓前祭祀の一形態 ── 」『史想』第20号、京都教育大学考古学研究会
水野正好1970「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』第4冊、滋賀県教育委員会
宮崎泰史2006「一須賀古墳群の調査Ⅳ」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』10、大阪府立近つ飛鳥博物館
山崎信二1983「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

報告書

・大阪府
大阪府教育委員会1993『一須賀古墳群Ⅰ支群発掘調査概要』
柏原市教育委員会1993『柏原市遺跡群発掘調査概報』1992年度柏原市文化財概報1992－Ⅳ
柏原市教育委員会1996『高井田山古墳』柏原市文化財概報1995－Ⅱ
柏原市教育委員会1998『平野・大県古墳群 ── 高尾山創造の森に伴う調査その2 ── 』柏原市文化財概報1997－Ⅲ
羽曳野市1994『羽曳野市史』第3巻史料編1
羽曳野市教育委員会1985『古市古墳群』Ⅵ羽曳野市埋蔵文化財調査報告書10
羽曳野市教育委員会1996『古市古墳群』ⅩⅦ羽曳野市埋蔵文化財調査報告書33

羽曳野市教育委員会2000『羽曳野市内遺跡調査報告書 ── 平成 8 年度 ── 』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書38

・奈良県

広陵町教育委員会1987『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第一冊

御所市教育委員会2002『巨勢山古墳群』Ⅱ御所市文化財調査報告書第25集

御所市教育委員会2005『巨勢山古墳群』Ⅴ御所市文化財調査報告書第28集

桜井市文化財協会1995『桜井市内埋蔵文化財1994年度発掘調査報告書』 1

當麻町教育委員会1994『平林古墳』當麻町埋蔵文化財調査報告第 3 集

高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第 5 冊

奈良県教育委員会1956『珠城山古墳』奈良県磯城郡大三輪町穴師

奈良県教育委員会1959『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄録』第11輯

奈良県教育委員会1972『烏土塚古墳』

奈良県立橿原考古学研究所1962『大和二塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第21冊

奈良県立橿原考古学研究所1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊

奈良県立橿原考古学研究所1981『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1979年度』

奈良県立橿原考古学研究所1985 a 『石田 1 号墳』奈良県文化財調査報告書第44集

奈良県立橿原考古学研究所1985 b 『沼山古墳・益田池堤』奈良県文化財調査報告書第48集

奈良県立橿原考古学研究所1987『与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書第56集

奈良県立橿原考古学研究所1988『奈良県古墳発掘調査集報』Ⅱ奈良県文化財調査報告書第30集

奈良県立橿原考古学研究所1990『斑鳩藤ノ木古墳第 1 次調査報告書』

奈良県立橿原考古学研究所1991『寺口千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第62冊

奈良県立橿原考古学研究所2003『上 5 号墳 ── 細川谷古墳群 ── 』奈良県文化財調査報告書第92集

奈良県立橿原考古学研究所・新庄町教育委員会1988『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第 1 冊

・京都府

大阪大学文学研究科考古学研究室2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学

文学研究科考古学研究報告第3冊
向日市教育委員会1988『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集

図表出典

表1　1：奈良県教育委員会1959、2～9、17～19、29～37：大阪府教育委員会1993、宮崎2006、10：原田1987、11：奈良県立橿原考古学研究所1988、12：御所市教育委員会2005、13・14・23・26・27：奈良県立橿原考古学研究所1987、15：奈良県教育委員会1956、16：桜井市文化財協会1995、20・41・43：羽曳野市、21：柏原市教育委員会1998、22：奈良県立橿原考古学研究所1985b、24：奈良県立橿原考古学研究所・新庄町教育委員会1988、25：奈良県立橿原考古学研究所2003、28：御所市教育委員会2002、38：柏原市教育委員会1993、39羽曳野市教育委員会2000、40：羽曳野市教育委員会1996、42羽曳野市教育委員会1985、44：奈良県立橿原考古学研究所1985a、45：奈良県立橿原考古学研究所1981

表2　大阪府教育委員会1993に基づく。

表3　寺前2005に基づく。

表4　柏原市教育委員会1996、高取町教育委員会ほか1984、向日市教育委員会1988、大阪大学文学研究科考古学研究室2005、當麻町教育委員会1994、奈良県立橿原考古学研究所1990、奈良県教育委員会1972、広陵町教育委員会1987に基づく。

図1・2：筆者作成、図3：表1に基づく、図4：大阪府教育委員会1993より転載。

SUMMARY

The Feast of the Dead: Symbolic Meaning of Funeral Pottery in Kofun Period's Burial Mounds

Naoto TERAMAE

Kofun period is of great importance in order to think the complexification of Japanese archipelago's societies. Changes or continuities in funeral rituals seen during Kofun period-age of great manpower mobilization for the construction of burial mounds-, are of great meaning in the matter of social stratification and religious belief.

The present contribution aims at a better comprehension of the transformation perceived in the pottery deposits found in passage graves of the 6Th Century.

Altogether with the apparition of passage graves in the archipelago, pottery deposit customs from the Chinese and Korean cultural area also came to take place. The mainstream theory in Classical History is then to consider, based on the myths reported in the oldest classical texts known in Japan (the *Kojiki* and the *Nihonshoki*), that these potteries were meant to symbolize food and cooking for the dead in his afterlife, and are then evidences of the ideological influence of the continent regarding the conception of life after death.

However, according to further data analysis made on our own, it appears that sensible different interpretations can be made of the pottery found in passage graves. Indeed, among the artifacts brought in the tomb, items related to cooking and conservation purpose are very scarce comparing to simple eating vessels. The former are generally associated with other criteria, emphasizing clearly Migrants from continent, while the latter are found in the biggest burial mounds of the time, emphasizing a highest social level among the archipelago society. As a consequence, and in contradiction to what is generally considered in Classical History, this differentiation between cultural attributes among burials tends to prove that, during the 6th Century,

キーワード：古墳時代後期，炊飯具形土器，ヨモツヘグイ